銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

三田弾正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

【Ｎコード】
Ｎ３８６３Ｘ

【作者名】
三田弾正

【あらすじ】
銀河英雄伝説～門閥貴族・・・だが貧乏！
執筆前に、元々このネタで行こうと、考えていた物です。
幻の皇后、シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人の子供の一人に転生し、これから来る破滅を何とか、避けようとする、皇女の物語です。
この小説は「らいとすたっふルール２００４」にしたがって作成されています。

第一話　お母様は、シュザンナ（前書き）

劇中の暗殺者は、ＣＶ真柴摩利　（シーマ・ガラハウ）さんのイメージです。

第一話　お母様は、シュザンナ

……暗い……それと暖かい？
耳に入るのは、ドイツ語らしい女性の声で、『私の可愛いベービ、今度こそ無事に生まれてきておくれ』

んん！
体が流れるーーーーーーーーー！？
眩しい此処はどこだ？？

『お生まれになりました、お美しい皇女様です』
誰かが言う声が聞こえる。
薄目を開けて見てみると、レトロな看護服を着た、女性が喋っている。

なるほど、さっきのは母親の胎内ですか。今は産まれた所のようです。

母らしき人が、『おお、私の可愛いベービ、今度こそ守りますからね』

看護婦が、『侯爵夫人様、皇女様のお体を、清浄して参ります』
そう言って、私を連れて別室へと移動しました。

看護婦が、体を拭きながら、恐ろしいことを、言い始めました。
『フッ・・チョロいもんだね、あんたに恨みはないが、生まれるところを間違えたのさ、自分の生まれの不幸を、呪うがいい』

うわあああ、シャアの台詞じゃあるまいし、目つき変わってる

よ、この女。
助けを呼ぼうと、大声で泣くが。
『フッ・・死ぬのが判るのかい、この部屋は、完全防音だから、ム・ダ・ダ・ヨ』
生まれてすぐに、死亡フラグですかーーー！！　酷すぎる！！
『この針の先端に付いている、薬なら、楽に死ねるから、安心して死にな』
針の先端がゆっくりと、右腕に、近づいていきます。
『傷が残ると面倒だからね、爪の間に刺してあげるよ』

痛い痛いですよ、爪の間なんて、拷問じゃあるまいし。
死ねるー、火事場の馬鹿力よ出てくれーーーーーーーーーーーーーー！！
右腕を振り回し抵抗したところ、そんな行動を予想していなかった、女の手から針が、飛びそのまま、その女の目に、突き刺さりました。
『ウギャアアアアアアアアーーーーーーーーーー！！！！』
その瞬間、すざまじい、悲鳴を上げて、女がのたうち回り始めました。
暫くすると、悲鳴も聞こえなくなり、女は動かなくなりました。

これからどうなるんだろうと、思っていると、あまりに帰るのが遅いのを、心配したのでしょうか、何人もの、女性が入ってきました、扉を開けた瞬間、中の惨状を見て、『皇女様はご無事か！』多くの方が、近寄ってきてたのですが、真っ先に、髪が乱れたままの母親らしき女性が、抱き上げてくれました。
『おお、あなたも、また失う所であった』
母親ですね、これは、泣きながら、ぎゅーっと、抱きかかえてくれます。

耳に聞こえるのは、『宮中警備隊を、呼べ』とか『侯爵夫人と皇女様を別室へ』とか、『背後関係を探れ』とかが聞こえてきます。

そのまま、別室で、清浄され、母親に抱かれて、病院らしき所から、彼女の家らしき、邸宅へ連れて行かれて、邸宅内の、赤ちゃん入れるプラ製箱に、入れられました。

しかし、いきなり暗殺されそうになるとは、私はいったい誰なんだ？

侯爵夫人とか皇女様とか宮中警備隊とか、現代じゃ聞き慣れない言葉だし。

侯爵夫人が、母親らしい。

皇女が私。

で宮中警備隊があると、どっかの王宮かな？

疲れたんで、少し寝よう。

ん、ガヤガヤする、また暗殺か？

ホッ、母親が、立ち上がったのか、ん？

『皇帝陛下のお成りでございます』

誰かがそう言っている。

皇帝陛下？？？

『シュザンナ、無事か』

『陛下』

『おお、この子が、予の子か』

『陛下そうでございます』

『おお、シュザンナに似て憂い子じゃ』

『陛下、危ういところでございました』

『聞いておる、大事に育てるのじゃ』

『警備も強化させよう、ようがんばった』
『陛下』
『今宵は、親子三人で過ごそうぞ』
『陛下』
意識が薄れていった・・・・・ＺＺＺＺＺ

一ヶ月ほどたって、私の、立ち位置が判明しました。

こんにちは、私は、テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムと申します。
ゴールデンバウム王朝第３６代皇帝フリードリヒ４世　と寵姫シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人との間に生まれた、第３皇女です。

大きな声では言えないのですが、実は私、転生者なんです。

ゴールデンバウム王朝と言えば、銀河英雄伝説の世界ですよ。

第３６代皇帝フリードリヒ４世と言えば、ラインハルトの、簒奪を知りながら、あえてそのままにした、あの皇帝ですよ。
　シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人と言えば、子供４人ぐらい殺されて、アンネローゼに嫉妬して、フレーゲル男爵に、そそのかされて、暗殺狙って失敗して、死んだ人じゃないですか。

私も暗殺されかかったし、これからも、危険がいっぱい。
今年って何年なんだろう、喋れないし、字も書けないから、どうにもならないよ。

食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返すこと、２年で、やっと、喋れるようなり、ムッター、ファーターと言うようになり、シュザンナ

母様と、フリードリヒ父様が、目を細めて、喜んでくれた。

どうも警備が完璧なのと、女だから、帝位に関係ないから、敵からは放置され始めたみたいな感じ。
ノイエ・サンスーシだからか、カレンダーとか無いし、年度が判らない、困った。
つたない言葉で「お母様、私の、お誕生日は、何年なの」って聞いたら。

『テレーゼ、難しい言葉を、覚えたのですね』
にこやかに、話してくれました。
『あなたのお誕生日は、４７１年２月３日生まれですよ』
「お母様、ありがとうです」
女官が来て、『テレーゼ様、お昼寝の時間でございます』
と来て、ベットへ寝かされました。
考えようとしたけど、寝てしまました。

翌日から、これからの人生について考え始めた。

ん、お父様が４８７年に亡くなられるから、そのとき、１６歳か、ラインハルトが、クーデター起こすのが、４８８年だから、１７歳、
お母様が、フレーゲルにそそのかされるのが、４８６年で１５歳、お母様が、暗殺未遂したら、私もとばっちり食うかも知れない。
それで生き残っても、アンネローゼを狙った女の娘じゃ、酷い目に遭いそうな気が。
それで、無事でも、リップシュタットの後に、あのランズベルク伯に我が儘小僧と共に、誘拐されるかも知れない。
路頭に迷うのはいやだ。

アンネローゼが後宮に来るのが４７７年ぐらいだから、あと４年

か、６歳に時に、父上に甘えまくって、アンネローゼが来るのを、
阻止できれば、安全だ。
よっし、それで行こう。

第一話　お母様は、シュザンナ（後書き）

いつか、続きを書きたいです。

第二話　韜晦作戦準備よし（前書き）

お待たせしました、少ないですが第二話です。

第二話　韜晦作戦準備よし

帝国歴４７３年７月１０日　　１３時

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸

「テレーゼ私の可愛いテレーゼ，陛下より沢山のドレスが送られて来ましたよ」
「お母様、お父様からですか」
「そうですよ、あなたのお父様からのプレゼントですよ」
「わーい、綺麗」
「本当に綺麗ね」
「お母様、着たいですぅ」
「そうですね、ヘレーネ、クラリッサ、支度をなさい」
「かしこまりました侯爵夫人」
「わーい、わーい」

帝国歴４７３年７月１０日　　１９時

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふうう、疲れたよ。
お母様ったらノリノリに成っちゃって、あれからお茶の時間を挟んで４時間も着せ替えだもの。
無邪気な２歳児を、演じるのも大変だよ。
相変わらず夕食はドイツ料理だし、たまには梅干しとお茶漬け食べたい。
お米と紅茶はあるから、探せばあるかも。けどお母様が食べるの許

してくれないな。

しかし、私を暗殺しようとした黒幕は誰なんだろう。
４７０年に、兄様が死産と言うことに、なってるけど暗殺の可能性が大だな。
確か母様は４回妊娠してるから、あと２人生まれるかも知れない。
無事に男子が生まれてくれれば皇位継承が拗れないかも知れない。
まあ私が生きているから妊娠しない可能性もあるけどどうなるやら。

暗殺の黒幕って、原作じゃ、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とか言われてるけど、ルードヴィヒ兄様が、生きている限りあの２家に帝位が行くことはないのだから、ルードヴィヒ兄様が、急死する事を知らない訳だから、そんなことをするんだろうか。
それとも、ルードヴィヒ兄様の急死事態が、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とかの、策謀だったとしたら、あり得ることだ。

しかし此処に、私というイレギュラーが、発生したそうなると、最低２人暗殺しないと成らなくなった、図らずもリスク分散が出来る訳か。
こうなると、あまり才気を見せると、敵の的になりそうだな。
暗殺から、逃れるためには、注意しつつこれまで道理、無邪気な皇女を演じ続けよう。
韜晦しなければ命が危ないからね。
これこそ韜晦作戦だ。

第三話　暗殺の裏幕（前書き）

短いです、すみません。
サブタイトル的に、此処で分けないと駄目だったので。
暗殺者経歴は、お察し下さい。

第三話　暗殺の裏幕

■オーディン　某所

「あの女、大言壮語吐いたくせに失敗するとは！」
「手練れの物が居たのでしょう」
「あの者から、こちらの正体が知れることはあるまいな？」
「それは、ご心配無用でございます。
かの者は叛徒共からの亡命者。ガンダルヴァ星系とかで植民者の反乱に毒ガスを使い住民を虐殺したとか。上層部の命令で暴徒鎮圧用無気力ガスだと、だまされたそうですが上層部がそれを隠すためにかの者達を事故に見せかけて皆殺にした中で唯一逃げてきた者、我々が突き出せば死有のみでございましたからな。生きるためには何でもしましょう」

「フフフどうせ成功しても始末するつもりであったのであろう」
「これは手厳しいすべては閣下の為でございます」
「おぬしには苦労かけるの」
「いえ臣の成すところでございます」
「しかしこれであの赤子の周囲に手を出し辛くなった」
「しかし男児ではありませんのでさほど気にする必要はないのでは」
「うむそうじゃな、昨年の赤子は男児であったあのときは見事に死産と言うことになってくれたからの」
「今回の事で、昨年の死産は暗殺だったとの噂が真実味を持ってまことしやかに流れ始めておりますから」
「ここ暫くはおとなしくするのが肝要であろう」
「御意」

第四話　皇帝即位２０周年記念（前書き）

連続投稿です、お待たせしました。

第四話　皇帝即位２０周年記念

帝国歴４７６年２月３日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」

「皇帝陛下、在位２０周年、万歳」
「テレーゼ皇女殿下、御生誕５周年、万歳」
「万歳」

「いや、めでたい、お美しい皇女様のご尊顔を拝謁出来ましたな」
「皇帝陛下もまだまだお若い」
「テレーゼ様の初お目見え、楽しみでしたからの」
「僅か５歳であの美貌、あと１０年もしたら、銀河一の美貌と成りましょう」
「今の内に、誼を結んおこうかの」
「我が家の、嫡男に是非とも降嫁して欲しいものよ」
「なんの、卿の嫡男は１７ではないか、遅すぎるわ、それに比べて、我が息は８歳でちょうど釣り合う」
「卿の息子は、卿に似てぶ男だそうじゃの、釣り合わんよ」
「なにを、なにを、我が息子こそふさわしい」

「話が弾んでおるの」
「これは、ブラウンシュヴァイク公」
「テレーゼ様は、お美しいの」
「奥方が、嫉妬しますぞ」
「ははは」
「伯父上」
「おおフレーゲル」

「それではまた」
「ヨヒアムよ。お前、テレーゼ様をどう思う？」
「お美しい、お方ですな」
「どうだ、お前が望むのなら、いずれ陛下に、お頼み申す事も出来るが」
「しかし、あの噂がございましょう、あの女が、首を縦に振るとは思えませんが」
「確かに、あの噂はあるが、わしは知らんぞ」
「しかし、２度続けての降嫁など出来ましょうか」
「オトフリート４世陛下の時代には、一人に３度続けての降嫁もあったぐらいじゃ」
「なるほど」
「お前も、誇り有る、ブラウンシュヴァイク一門の男としての矜持を見せてみよ」
「伯父上」
「考えておくことだ、権門とはそうゆうものだ」
「さてヨヒアムよ共に挨拶に参るぞ」

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」
「皇女陛下、我がヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」
「なんの、我がヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」

「これこれ、テレーゼが困っておろう、まだ幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」
「皇帝陛下」
「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」
「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレーゼや、兄上じゃ」
「兄上ですヵ？」

「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」
「兄上様、こんにぃちゅあ」
「ああ、こんにちは」
「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」
「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」
「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありましょう」

「うぅー」
「どうした、テレーゼ？」
「おちっこー！」
シャーーーーーーー
「わぁあぁん」

「陛下お召し物が」
「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かろう、
すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、
暫く、儂の代わりをしていて欲しい」
「判りました、陛下」
「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」
「おとうしゃま、ぐすぐす」

がやがやがや

「皇女様が、お漏らしとは」
「未だ5歳じゃしかたあるまい」
「最近は、陛下もテレーゼ様に会いによくベーネミュンデ侯爵夫人

の所へいくそうじゃ」
「それで、夫人のご機嫌がよいのですな」

「面白いことよの」
「これは、リッテンハイム候」
「先ほど挨拶してきたが、皇女殿下がこの目出たきときに、お漏らしとはの、我が家のザビーネは3歳だがその様なことはないぞよ」
「侯爵、不敬ですぞ」
「なんの、酒の上での、戯れ言よホホホホ」

帝国歴476年2月3日　深夜

■オーディン　　某所

「今宵の宴はいかがでしたか？」
「ふむ、初めて、あの娘にあったが、挨拶中に、お漏らしをしておったわ」
「ほう、恥を掻いたわけですな」
「そうよ、舌足らずに、喋っておった、そのまま、陛下のズボンに、漏らしおった」
「前代未聞ですな」
「あの女が甘やかして居るのだろう、
聞いたか、今回着る為に、陛下から、ドレスが1000着も届いたそうだ」
「よいではございませんか、馬鹿な寵姫と、その娘、我が儘に育っていただければ、誰も支持しません」
「そうよの、適齢期が来たら、どこぞの門閥貴族へ、降嫁させるように、お勧めすればよいの」

「さようでございます」
「今回の姿を見て、安心したわ、あれは、捨て置いても平気よ、ただ寵姫達に、男児が生まれたら、始末せねばならんがな」
「御意」

第五話　皇帝即位２０周年記念裏側（前書き）

第四話の主人公側です

第五話　皇帝即位２０周年記念裏側

帝国歴４７６年２月３日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

「皇帝陛下、在位２０周年、万歳」
「テレーゼ皇女殿下、御生誕５周年、万歳」
「万歳」

父様と私のお祝いに、帝国中の貴族、廷臣、軍人、そして、令嬢や令息達が、これでもかって、着飾って、来ている。
贅を尽くして、豪勢すぎるわ、ドンだけ金かけてるのよ。
貴族連中が、集まっては、降嫁とか、うちの子にとか、狙われてるのありありですね。

おっ、あれは、ブラウンシュヴァイク公じゃん、リアルに見ると、なんかねー。
一応、義兄になるわけだけど・・・・・ねー。
誰か近づいていていった、ん？あの髪型、あの顔、未だ若いけど、フレーゲルじゃない？
２人で話し始めたみたい。

ジュースでも飲みますか、演技も疲れるし。

「お父様、おれんじじゅーすが欲しでしゅ」
「誰か、テレーゼに、オレンジジュースを持ってまいれ」
「はっ」

「お父様、ありがとうでしゅ」
「うむうむ」

うげ、ブラウンシュヴァイク公とフレーゲルがやって来たよ、いやだな。
「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」
「うむ、公爵」
「皇帝陛下、皇女殿下、此処にいますのは、甥のフレーゲル男爵です、どうぞお見知りおきを」
「ヨヒアム・フォン・フレーゲルと申します、皇帝陛下、皇女殿下の御意を得まして、子々孫々の譽としたく存じます」
「そうか、フレーゲルよ、励め」
「御意」
フレーゲルかよ、この頃から、嫌みっぽく感じるな。

また貴族が来た、今度は誰だ？
「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」
「うむ、候爵」
ああ、この髭、リッテンハイム候じゃん

次々に挨拶来るから、かったるい。
「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」
うげ、誘拐犯の、えせ詩人じゃん、この頃から、下手な詩を、作ってたのか。

「皇女陛下、我が、ヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」
自意識過剰の、自己陶酔来たー。

「なんの、我が、ヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」
ん、ヘクスハイマーって聞いた気が・・・・・・・あっ、指向性ゼッフル粒子事件と遺伝子欠陥か。

「これこれ、テレーゼが、困っておろう、まだ、幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

あっ、考えていて、無口になっていた。

「皇帝陛下」
「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」
「はい、可愛ゆうございますな」
「ほれ、テレーゼや、兄上じゃ」

ルードヴィヒ皇太子か。

「兄上ですヵ？」
「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」

敵を欺くには、まず味方からと言うから、馬鹿をやりますか。

「兄上様、こんにぃちゅあ」
「ああ、こんにちは」
「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」
「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」
「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありましょう」

しまったな、トイレに行きたくなってきた。
此処は、漏らそう、死にたいぐらい恥ずかしいが、これほどのイン

パクトはあるまえ。

「うぅー」
「どうした、テレーゼ？」
「おちっこー！」
シャーーーーーーー
「わぁあぁん」

お父様、冷たいでしょうが、申し訳ありません。

「陛下お召し物が」
「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かろう、
すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、
暫く、儂の代わりをしていて欲しい」
「判りました、陛下」
「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」
「おとうしゃま、ぐすぐす」

ああー恥ずかしい！！
一生言われるんだろうな。
冷たいし。
早く着替えよう。

第六話　士官学校探訪（前書き）

書くのが止まらない。

第六話　士官学校探訪

帝国歴４７６年７月８日

■オーディン　帝国軍士官学校　　アルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将

本年度の士官学校入校式に、皇帝陛下のご臨席を、賜る事になった。
国防の第一たる士官達にお言葉をいただけるそうだ。
その後、在校生の授業も見学するとのことだ。
本来であれば、入校式当日は授業はないのだが、本日は普通道理行うことと成った。
長い一日と成りそうだ。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

全く今日はついていない、昨夜の女は良かったが、旦那が居るとは知らなかった。
いきなりベランダから逃げる羽目になるとは、まったく。
しかも隣には、朝からテンションが異様に高い鶏冠頭が居るし、五月蠅い頭が痛いだろうが！
皇帝の臨席だって全くくだらん、気まぐれはやめて欲しい物だ。

■オーディン　帝国軍士官学校　　皇帝フリードリヒ４世

士官学校へ行くことになった、本来であればこの様なことは、する気が無いのだが、テレーゼが兵隊さんの学校を見てみたいというので行くことにした。

■オーディン　帝国軍士官学校　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

やって来ました、士官学校、父様がへんな女(アンネローゼ)に、引っかからないように、最近色々なところへ、連れて行ってもらっています、上目遣いのおねだりモードで大概ＯＫです。
それに、今年の入学生には原作キャラが居ないけど、在校生には、ロイエンタール、ミッターマイヤー、ビッテンフェルト、ワーレン、アイゼナッハとか居るし、顔見せには良いかなって。

父様と一緒に侍従武官やらと共に学校へ行くと、宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥が校長のアルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将と共に、迎えに出てきた。
へー、ミュッケンベルガーは未だ長官じゃないんだ。
挨拶が終わって早速、入校式で訓辞を行う、父様と長官、今までこういう事は余りないことらしくて、校長が卿達は名誉であるとか言ってる。最後に私が、「お兄ちゃん達、頑張ってくだちゃい」て言ったら、結構盛り上がってしまった。萌はこの時代にも通用するんだね。

次に４年の授業を見学、戦略理論見てたら、教官が良いところ見せようと、前の方の学生にこの問題を解けって言って、立ち上がったのが、錆銅色の髪で後頭部が跳ねてるって、アイゼナッハじゃない？
この頃から無口だったんだな、ヤーとかしか言わないし。

次に行くのか、話してみたいんだけど、仕方がないか。

続いて3年にやって来ました、3年生は格闘術ですか、体操着着てやってますね、まあ皇帝の手前、装甲服は着れないんでしょうね、勝ち抜きをやっているようで、ベスト4が決まったようです。
ここから、天覧試合と言うわけですね。
残ってるのは、やっぱり、ロイエンタール、ビッテンフェルト、ワーレンですね、残り一人は見たこと無いので、モブキャラですね。

始めの合図で、4人が戦闘始めましたね、おっビッテン強いモブを一発ですっ飛ばした、ワーレンとロイエンタールは、間合いを計ってる、ワーレン出るけど、ロイエン軽く足払い、すっ飛んだー、最後は、ビッテンVSロイエンですか、ビッテン相変わらず猪突猛進、ロイエン飛んだ、再度突っ込むビッテン、ロイエンそのまま受け流しながら、足払いしながら、一本背負いだ。
ロイエンタールの勝ちだ。

ロイエンタールには、父様から金時計が贈られました。
私は、「父様絵本で見たんだけど、勝利の女神がキスするのってありですよね」て言ったら。
『よいよい、テレーゼの好きにするがよい』とにこやかにOKしてくれました。

その後、ロイエンタールのホッペにキスしました。
ロイエンタールは、ビックリしてましたね。
ビッテンフェルトには、持ってきていた、銀製の櫛をあげました、喜んでいたよ。
ワーレンには、ハンカチをあげました、恐縮ですって言ってた。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロ

イエンタール

驚いた皇帝から金時計を下賜されるとは、さらに驚いたのは皇女が俺にキスしたことだ、勝利の女神うんぬんと言い、皇帝の許可を受けほっぺたにキスしてきた、明日から噂が流れるだろう、マールバッハの家からも言ってくるかも知れんな。

■オーディン　帝国軍士官学校　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ワーレンと話したのだが、まさか陛下から、お言葉を賜るとは思わなかった、それにだ、皇女様が、にこやかに来て、『すごいです』とおっしゃって、『髪が乱れてますぅ』とご自身ご使用の銀の櫛を賜されたのだ、大変感動した、大事にしよう。

■オーディン　帝国軍士官学校　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ビッテンフェルトが話してきたのだが同感だった、しかし俺たちが、最後まで生き残り戦い終わると、４人とも皇帝陛下から、お言葉を賜るとは正直驚いた。
しかも、皇女様が、『汗がすごいですぅ』と言い、ご自分のハンカチを、俺に下賜されるとは驚きだ、使うわけにもいかんから、大事に保管しよう。

■オーディン　帝国軍士官学校　　テレーゼ・フォン・

ゴールデンバウム

３年の授業が済んで、いよいよ疾風ウォルフの２年生です。
戦術理論の授業か、教官理屈倒れのシュターデンじゃん、うわー、『皇帝陛下の御為に』とかそんなことばかり言い始めたよ、父様の前だからみんな真剣に聞いてるけど、眠くなるねこれ、んーウォルフ居るかなー、前の方には居ないな、あっ居た後ろの方で、なんか書き物しながら見てる。残念、前にいれば喋れたかも知れないのに、仕方ないか。

結局シュターデンの眠くなる授業のせいで、途中から寝てしまい、気がついたら、宮殿に帰る車の中でした。

帰ったら、お父様とお母様と一緒に御夕飯を食べて寝ました。
最近とみに、お父様とお母様の仲が良いので、アンネローゼフラグを断ち切れそうな勢いです、このまま行けば、ラインハルトは只の人だね。

帝国歴４７６年７月８日　深夜

■オーディン　　某所

「して今日の動きはどうじゃった」
「間者の話ですと、格闘戦を見て、喜んでいたとのこと」
「くだらんな」
「さらには、勝者に話しかけ、頬にキスをしたとか」

「立場が判らん、子供じゃ」
「まことに」
「最早、放置しても良いかもしれん、あの者は、どう言っておる」
「無邪気で、思慮の足りない子供だと」
「陛下もあの女の元に通い詰めておる、最早又、子ができるやもしれん」
「そちらに力を入れるようにと命令せよ」

第六話　士官学校探訪（後書き）

次回予告
パッパパーパラー、
皇帝の浮気癖を阻止しようと、テレーゼは行く、そして母に運命の日が！
次回、銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません
第七話　初夏の風そして
銀河の歴史が又１ページ

第七話　初夏の風そして

帝国歴４７７年３月３１日

■　オーディン　　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　最近お母様の機嫌が非常によい。
やはりお父様が毎日のように来てくださるからだろう。
昨日もオペラ鑑賞に連れ立っていった、ローエングリンらしいがよく知らない。
メックリンガーなら知ってるだろうけど、未だに繋がりがないし。

　このところは、ロリコン趣味の女遊びが絶えてきて真っ当な生活環境へと変わってきている。
たくよー５０過ぎの男が１５歳を愛人にするんじゃねーよ。
それを勧める、茶坊主どももどうしようもない。
やっと女の陰を薄くできたから、これからも変な女（アンネローゼ）に、引っ掛からないようにさせなければならないな。

　帝国歴４８７年にお父様が亡くなられるのを、防ぐためお酒をあまり呑まないように、あちらこちらへと一緒に動いて出かけるようにしている。
最近は顔色も良く息切れも無いようだ。
この半年でも山登り（庭園内の丘だけど）やハイキング、乗馬など一緒に楽しんでいる。
意外だったのはお父様は乗馬がヘタだったことだ、若い頃放蕩三昧だったため遊んでばかりでやってなかったらしい。

出来るなら何とかして役立たずの門閥貴族を潰して、帝国を再生したいな。
まずは、グリンメルスハウゼン爺様に繋ぎを作って、相談に乗って貰わないとだめだな。
んーしかし、いきなり会うと他の者に不審がられるから何とかチャンスを作らないと。

そう言えば、ケスラーって何時から、グリンメルスハウゼン爺様の部下だっただろう。
映像見るとずいぶん親しそうだっし、個人的にかなり前から繋がりがあったのかもしれないな。
４７２年に士官学校卒業してるから、２５歳で大尉ぐらいかな？
ケスラーが来てくれれば、これほど頼もしいことは無いのに。

帝国歴４７７年４月１日

■　オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日お母様から重大な発表があるとのこと。
お父様が臨席する夕食時に発表するからと待ちの姿勢。
夕方６時にお父様が来てくれました。
そしてにこやかな、お母様から発表が有りました。
『テレーゼに弟か妹が出来ますよ』
流産予定の子供か。守れたら守りたいな。
「お母様、わー嬉しいおめでとうです」
お父様も喜んでくれました。

良しこれで、当分の間他の女は排除できるだろう。
エイプリルフールじゃないよね。

帝国歴４７７年４月

■オーディン　某所

「あの女が又妊娠したと」
「あの者よりの知らせにございます」
「早い内に始末させるのだ、小娘のように生き残る可能性もあるのだから」
「流産と言うことでよろしいでしょうか」
「お前に任せる」
「御意」

帝国歴４７７年６月３０日

■　オーディン　　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふううう、そうなんだよね。
新しい寵姫としてアンネローゼがやって来たそうだ。
お母様が非常に怒っておられた、危険な兆候だ！

アンネローゼが来たのって、宮内省職員が自分の点数稼ぎのために見つけてきたんだよね。
そうならないように、お父様をお母様の元へ日々通わせる作戦だったが、

子供が出来たから夜のお勤め無いから、お寂しいであろうと勝手に連れてきやがった。
余計なことをしくさってからに！

ここの所お母様の所へ度々通っていたから、
安心してアンネローゼを探せ作戦を行わなかったけど
てか探せるわけがないけど。

原作道理起こるのか、イベントが！
歴史の修正力というやか、はたまたバタフライ現象か。
これでラインハルトがやって来る！！！
帝国の危機だー！

お父様も押しに弱いから、認めてしまうし。
お偉いさん達もあまり、お母様に権力が行くのが危険と感じたのだろう。
クソッ、コルヴィッツめ一時は出世して喜んでいるだろうが、いつか必ず後悔させてやる！！

とにかくも信頼できる味方を探さなきゃだめだ。
グリンメルスハウゼン爺様に早く繋ぎを取らないといけなくなった。

帝国歴４７７年７月

■オーディン　某所

「陛下に新たな寵姫が出来たな」
「はっ宮内省の役人が市井で見つけてきたとのこと」
「平民か？」

「いえ一応帝国騎士ですが、平民以下の生活だったとか」
「歳は幾つだ」
「15歳で在ます」
「良いの、ここの所。陛下は酒もあまり飲まず健康になりつつあるから、
新しい寵姫に性を吸われれば早くに衰弱しよう」
「まことに」
「政権にしがみつきたがるあの老いぼれ共に、
侯爵夫人の権勢が増えると困ると、
囁き新たな寵姫をもって侯爵夫人を牽制せよと言ったが、
これほど早く決まるとはおもわんかった」
「これで流産すれば万々歳じゃ」
「御意」

第八話　織り姫ＶＳ彦星（前書き）

時間が中々進まないので、戦闘シーンが殆ど無い銀英伝に。

第八話　織り姫ＶＳ彦星

帝国歴４７７年　７月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　　オルテンシア庭園
テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日非公式ながら新寵姫アンネローゼと顔を合わせる事にした。
本来であればこの様なことは異例なのだが、
数日前お父様に『会わせないと二度と一緒にお風呂に入らない』と
だだをこねて今日という日を迎えた。
その際に弟も見たいから連れてきてと無理矢理に連れてこさせること
にした。

お母様にはコッソリと泥棒猫の顔を見てきますと言ってきた。

形式的には庭園散歩中の、皇帝父娘が偶然庭園に来ていた新寵姫姉
弟に会うという良くあるパターン。
取りあえず一発目が肝心なので、如何にも皇帝の娘という態度をと
らなきゃね。

庭園の東屋で待っていると侍従に先導されたアンネローゼとライ
ンハルトがやってきた。
おうおうアンネローゼの人生あきらめた感じとラインハルトの苦虫
つぶしたような顔を無理に平常にしているような感じがよくわかる
な。

此方の侍従がわざとらしく大きな声で『皇帝陛下ご臨席でございま
す』と言うと

お父様が『うむご苦労、して其所に居るのは誰じゃ』と言えば
向こうの侍従が『グリューネワルト伯爵夫人とその弟にございます』
と返す
お父様『此方へ来るが良い』
ですぐ近くへ来たというわけ。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」
「このように綺麗な庭園は初めてでございます」
必死に自分の運命を諦めて居る方は気の毒なんだけどね、けど貴女こそ最大のキーパーソンですから。
「そこもこは誰じゃな」
「伯爵夫人の弟にございます」
「面を上げよ」
「良い目をしておるな」
目の奥に憎悪の炎が見えるよ。
この目を見て良い目だなんて、お父様この時からラインハルトに期待していたのかもしれないな。
「今年より幼年学校で学ぶとのことです」
「励めよ」
「はっ」

ぷぷっスゲー演技腹の中は煮えくりかえってるだろうに良くやるよ。
で帰って一人で怒りを滾らせるんだね、
キルヒアイスが未だ来てないから。

さて私の出番だ一丁やりますか。
「お父様その方が伯爵夫人ですか？」
「そおじゃ伯爵夫人じゃ」
「グリューネワルト伯爵夫人ご機嫌麗しく、私テレーゼ・フォン・

ゴールデンバウムでございます」
「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、アンネローゼ・フォン・グリューネワルトでございます」
「弟御の名は何とおっしゃるのですか」
いきなり振られて驚いてるな　くくく
「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、ラインハルト・フォン・ミューゼルと申します」

　ここでいたぶるのも一興だけれど、必要以上に憎悪をたぎらせる必要もあるまい。
普通にやりますか。口元を扇で隠してお母様のような口調で。
「ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。
将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」

ふふ、とまどってら何を言ったらいいかわからんだろうね。

「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろう」
「お父様ー昼餉に行きましょう」
「そうじゃの」

帝国歴４７７年　７月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　　オルテンシア庭園
ラインハルト・フォン・ミューゼル

今日姉上と共に皇帝に会いに来た、姉上を奪った敵の姿を見てやる！
案内役が姉上と俺を連れて行く、偶然を装い会うらしいがくだらん

作法だ、俺が宇宙を手に入れたらくだらん作法など廃止してやる！
皇帝とその横に小さな少女が居る、皇帝の娘か。
「伯爵夫人此所はどうじゃな？」
「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

わざとらしい挨拶が続く。
皇帝が俺の存在を聞いてきた、知ってるだろうにくだらん。
憎悪の目で見たが、皇帝は気がつかないようだ。
「良い目をしておるな」
「今年より幼年学校で学ぶとのことです」
「励めよ」
言われたので「はっ」と言ってやった。

いつか貴様にその犯した罪にふさわしい最後をくれてやる！
キルヒアイスはどうしているんだろう？

姉上に皇女が挨拶してきた。
そのうちに俺の名前を聞いてきた、姉上に迷惑がかかるといけないのでしっかり作法道理に名乗ってやった。
するとだ『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。
将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。』
上から見下すような傲慢な態度で話してきた！
近衛だとふざけるな！
俺は案山子になるつもりはない！
姉上のため俺は宇宙を手に入れるのだから。

帝国歴４７７年　７月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　　オルテンシア庭園　　アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

今日皇帝陛下よりテレーゼ皇女殿下が私とラインハルトに会いたいと言うことで参内させるようにと連絡が来たため、ラインハルトを連れて庭園へ向かった。
侍従の案内で皇帝陛下にお会いし、ご挨拶後にテレーゼ皇女殿下が私に挨拶していただいた、私も挨拶を仕返した。
テレーゼ皇女殿下はにこやかに挨拶してくれその後にラインハルトにの名前を聞いてきた、
ラインハルトがしっかりと挨拶できるか心配したのですが、ちゃんと挨拶できて安心したのですが、

皇女殿下が『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。
将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」
とおっしゃった所ラインハルトの顔がきつくなって来たのです、
あの子は少々気の短いところが有るので何かしないか心配でしたが、
皇帝陛下が「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろう』
とフォローしていただいたのでありがたかったのです。

第八話　織り姫ＶＳ彦星（後書き）

アンネローゼ側を入れました

第５次イゼルローン攻略戦の並行追撃作戦対策作戦は有るんですが、そこまで行くのが大変。

第九話　それぞれの昼餉（前書き）

ぎりぎり１２日更新です

第九話　それぞれの昼餉

帝国歴４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

アンネローゼとラインハルトとの面会を終えたあと、お父様と馬車でお母様の待つ館へ向かう途中
「お母様の真似をして喋って見ました」
「ははははそうかそうか」
どうやら誤魔化せたようです。

今日は昼餉をお母様とお父様一緒に食べるようにして貰っていますので、
あとは本人達の気分次第で落ち着くのではないかと思うのですが険悪なら私が出て仲裁を計るつもりです。

館に着いたらお母様がお出迎えに出てきていました、
やはり焦りがあるのでしょう普通なら執事が迎え入れる物なのですがね。
お母様はにこやかに「陛下きていただき有り難うございます」
ふむ普段の母上の苛つきが消えている良いことだ。

食事中は当たり障りのないお話や私の教育に対する話などだったのですがねー
デザートになるとお母様が『新しい寵姫の寝心地はどうですか』ってジャブな嫌味を一発
うわー母様ストレート過ぎます子供がいるのですよ

すると父様『テレーゼが嫌がったから、まだじゃ、元々国務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』
すると母様少し考えてから、『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレーゼの為にも館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』

おっ母様手を未だ出してないと聞いて少しは和らいだ。
まあ数日前から母様をフォーローし続けたかいがあったよ。

他の寵姫の手前毎日来るのは無理だけど、出来るだけ多く来てくれると父様が約束してくれました。
家庭円満に成らなきゃだめだね。

結局その日はお父様はお母様と私の教育について話し合うことになり館に泊まることになりました。
お母様は夕餉の際には数日前までの苛つきやドンヨリした空気が無くなり晴れ晴れとしていました。
よかったよー。

　けど今年の九月から始まる私の本格的な教育について話があったので、
私としては内容が厳しそうなのでブルーに成りましたよ。
てか、紅茶の銘柄だとか、お香の銘柄、とかいらねーー！！
ご学友を誰にしようとかも話が出たし、話が合うか不安だね、

こちとら、皇女でも根が庶民ですからね。
なまじ原作知ってるし下手に親しくなってその子が不幸になるとか知ってると絶えられないじゃん。
逆に災いになるのだとどうしていいやら。

なまじ軍事知識があるのも善し悪しで、口を出したいんだが出せないもどかしさ。
アルレスハイム、サイオキシン麻薬、イゼルローン攻防戦、ティアマト会戦とか
軍事的に教えたいのが教えられない、教えたら教えたで変に思われるし
暗殺の黒幕も未だに解らないし、下手に爪を出すわけにはいかないんだよね。
こまったもんだ。
相談できるブレインが欲しい今日この頃。
グリンメルスハウゼン爺さんに早く会いたいのに機会が全くない何とかしてくれーー！

帝国歴４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　フリードリヒ４世

　本日テレーゼが、新しき寵姫アンネローゼとその弟に会ってみたいと言われたために場を設けることにした。
わしは、娘には弱い父親なのでついついテレーゼに甘くしてしまう。
アンネローゼの弟に会うのは初めてじゃったが、あやつに会った時心地よさを感じてしまった、
あの目あの表情、普段皇帝たるわしに媚び諂い裏では罵っている者たちと違う
わしを恨み憎む目がはっきりとわかった。
あの者こそわしの長きに渡る鬱積とした心を流してくれるのではないか。
あやつは、わしの願いをかなえてくれるであろうか。

だがテレーゼとシュザンナを巻き込みたくはないものじゃ。

テレーゼも何か感じたのか、あの者に挑発的な態度で臨んでいたの、
普段のテレーゼとは何か違うテレーゼを見たようじゃ。
テレーゼ自体はシュザンナのまねをしたと言っておるが、
あれはわしと同じかも知れん、５０年間周りを謀り続けたわしのように。
テレーゼがそうであれば、また違うやり方もできるやも知れん、
グリンメルスハウゼンに相談してみるか。

帝国歴４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

　本日テレーゼが憎っくき女を見に行くという。
そんな女見に行く必要がないと言ったが、『お父様を連れてくるし
泥棒猫を見てきます』と
健気なことを言ってくれたので送り出すことにした。

昼餉の用意をさせ待っていると、テレーゼが陛下をお連れしてくれた、
玄関へ迎えた時テレーゼとにこやかに手を繋ぎながら馬車から降りてくる姿を見たとき
今までの鬱積した気持ちが消えていく気がした。

けれども少しは陛下に怨みの一つも差し上げようと、
『新しい寵姫の寝心地はどうですか』いってあげましたわ。
陛下は慌てて『テレーゼが嫌がったから、まだじゃ、元々国務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』

まあ寵姫のもとへ行くのも仕事のうちですから、そこのところは納得してあまり行き過ぎないように、
『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレーゼの為にも館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』と釘を刺しておきました。

今日のこともテレーゼが私のことを思い行ってくれたこと、
本当にこの子は健気で可愛いのでしょう、
ずっとずっと守りますからね、私の大事な大事なテレーゼ。

帝国歴４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　　グリューネワルト伯爵邸

「ラインハルトいよいよ明日から幼年学校ですね」
「はい姉上」
「ラインハルト別に軍隊へ入らなくても、官吏とかでもいいのじゃない、あなたが危険なところへ行く必要はないのに」
「姉上僕は軍隊へ行って出世したいんです」
「無理をする必要はないのですよラインハルト」
「いえ自分の決めた道です」
「そうですか」

一人で大丈夫なのかしら、ジークが居てくれたら。
「ラインハルト一人で大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ姉上、もっともキルヒアイスが居ればもっといいでしょうけど」
「それではジークが言いといえば入学できるよう
皇帝陛下にお願いしてみます」

「姉上そんな事が出来るのですか？」
「ジーク一人なら可能だと思います」
「姉上よろしくお願いします」
「けどジークが行きたいと言ったらですからね、無理やりはいけませんよ」
「わかっていますよ、けど絶対キルヒアイスは来てくれます」
「そうなるといいわねラインハルト」
「ええ」

第十話　ロイエンタールはロリエンタール？（前書き）

士官学校の一年後です

第十話　ロイエンタールはロリエンタール？

帝国歴４７７年７月８日

■オーディン　帝国軍士官学校　　リヒャルト・オイゲン

今年も新学期が始まる私も此で２年だ。
士官学校は２人部屋で１年と３年、２年と４年という感じで、上級生と下級生をペアーにして部屋割りをしている。
私が去年大いなる大志を抱いて入校したのが昨日のように感じる、まさかの皇帝陛下と皇女殿下のご臨席、そしてお言葉を賜るなぞ、平民としては破格のことだった。
さらに皇女殿下が『お兄ちゃん達、頑張ってくだちゃい』と仰った時の同期生の興奮ぶりは今でも耳に残っている、あれで皇女殿下のファンになった同期達が多数でた、かく言う私もファンだ。

そのあと陛下達は各授業を見学していったそうだが、３年の格闘授業で決勝者４人に陛下お褒めのお言葉を賜ったそうだ。
それよりも全校生徒が注目したのは、優勝者であるロイエンタール先輩が皇女殿下にキスされたという話だった、この話は噂好きな連中の手で夕方には全校生徒に知れ渡り、
テレーゼ皇女様ファンクラブ（当日の昼過ぎには雄志が作成していた）の面々が『ロイエンタールの女ったらしー！』や『ロリエンタール！』と騒ぐシーンも見られた。先輩方の話によるとロイエンタール先輩は入校当初から女癖が悪く彼方此方の女性と浮き名を流していたそうだ、彼女を寝取られた方も居るそうで、その男が我らがアイドル、テレーゼ皇女様のキスを奪ったと尾ひれが付いたらしい。
実際には頬にキスだったそうだが、食堂の灼熱ぶりは凄まじかったものだ。

そのほかテレーゼ皇女様が2位のビッテンフェルト先輩に銀の櫛を3位のワーレン先輩にはハンカチを賜った後が大変だった。
先輩方が貰った物を是非見せてくれと行列を作り、ハンカチに至っては香りをかがせろとか、変態じみた方々が多数出現した。
大騒ぎになりシュターデン教官が怒りまくっていた懐かしい思い出だ。

しかしその当事者の一人ビッテンフェルト先輩とルームメートの私にしては先輩が貰った櫛をコッソリ見せてくれだの、舐めさせろだの言われて困ったものだった。
ルームメイトとして先輩と住みだして4日目だっからどういう反応をして良いか迷った物だ、
先輩は概して豪快、大雑把、猪突猛進と来ているが悪い人ではないし、親身になって色々教えてくれている、だが歯止めがきかないときは自分が押さえ役として動かざるを得ないのが何ともいえないな。
2年に成ってルームメイトが変わるかと思ったが今年もビッテンフェルト先輩と同室である意味期待ある意味ガッカリな自分が居るが微妙なところだろうな。
先輩はさっきから洗面台で髪型の調整をしていて最後の調整にあの銀の櫛を使っている。
さてあと一時間もすれば新学期だそろそろ支度をしよう。

■オーディン　帝国軍士官学校　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

もう4年長かった士官学校も今年で終わりだ、去年は始まって早々皇帝陛下とテレーゼ皇女様がご臨席して銀の櫛までいただいた、

今でもテレーゼ皇女様の笑顔が目に浮かぶ、貰った櫛はこの髪型の仕上げに大事に使わせて貰っている、うむそろそろ支度をせんと遅刻してしまうな、「オイゲンそろそろ行くかー」

■オーディン　帝国軍士官学校　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

あれから1年か格闘授業で3位になり陛下のお言葉と皇女殿下からハンカチを賜ったのが昨日の事のようだ、ハンカチは大事にしまっておこうとしたが、どこから噂が漏れたのか『見せろ』『香りをかがせろ』などの輩が多数寮の部屋にまで押しかけて来るようになった、部屋の鍵を開けようとする馬鹿まで現れたので、仕方なく額に入れ両親に預けて実家へと避難させた。本当は持ち歩きたいのだ仕方がない。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

やっと4年だ去年は散々だった。
いきなり皇帝から金時計は貰うわ皇女からキスを貰うわ。
其れだけなら良いそれに尾ひれが付いて『ロイエンタールが皇女のキスを奪った』だの『5歳児に欲情するロリエンタール』『女の敵』『馬鹿野郎ー』『テレーゼ様汚した悪い奴』だのさんざん言われまくり、
遊び相手の女達にも『ロリなんでしょ』『ツルペタが好きなのね』『皇女様相手では分が悪すぎます』『皇女様のお相手を奪うことは出来ません』とか言われまくって女があまり寄りつかなかったのだ。

俺が何をしたと言うのだ、みんな勘違いではないか！

最近疎遠だったマールバッハの伯父もいきなり連絡してきてパーティーに招待され行ってみれば、
会う人それぞれに『テレーゼ皇女殿下より接吻を賜り有望な甥でございます』と紹介はするわ
『オスカーどうだ養子に成らんか』と言ってくるし、全くろくな事が有りはしない。
早く卒業して任務に付きたい物だ。

■オーディン　帝国軍士官学校　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

今年も新学期が来たいよいよ俺も3年か、去年は学校中がテレーゼ皇女様で盛り上がっていたな、3年生のロイエンタールという先輩がキスしたとかで、大波乱が起きていたが、自分はエヴァ一筋だから気にしなかった。
卒業したらエヴァにプロポーズしたいが、エヴァが受けてくれるか不安なんだよな。

■オーディン　帝国軍士官学校
リヒャルト・オイゲン

大変な事が起こった。今年もテレーゼ皇女様が来て下さるはずだったのだが、校長フライエンフェルフ中将とシュターデン教官が昨年の新学期早々の学校で起こった騒ぎ（ロリエンタール事件）を鑑み今回はご遠慮願ったらしい、其れを聞いた在校生は大騒ぎを起こ

し、『校長を変えろ』『シュターデン消えろ』とか大変だった。皆ガッカリしている残念だ。

第十一話　刃物女とお友達（前書き）

第十話最後を補填しました。

第十一話　刃物女とお友達

帝国歴４７７年７月２５日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日９月から一緒に勉強するご学友との顔合わせが有るのでパーティーを開くことになった。
いやね一々そんなことでパーティー開くのも馬鹿馬鹿しいと思うんだけど、貴族社会じゃ此が常識で議会無いからこういう時に色々な決め事とかもするんだって。

いつもの通り『皇帝陛下の御為に』『皇太子殿下万歳』『皇女殿下万歳』
とか言ってるんだけど、大半は内心お父様を侮蔑してるんだよね。
虎視眈々と次の皇帝の位を狙う物達や媚びを売って要職に就こうとする者千差万別だね。

向こうでは、ルードヴィヒ皇太子がにこやかに挨拶しているんだあの元気な兄上が４８３年ぐらいに急死って怪しくない？殺られたんじゃないかと推測してますよ。
ＯＶＡでヘルクスハイマーがリッテンハイムに死産したと言われている兄上を殺したんじゃ無いかと言って、私は知らんがブラウンシュヴァイクならやりかねないと言っていたから、しかも４８３年と言えば父様も重篤に陥っていた、その時に後を継ぐべき皇太子が急死し残るのは門地の後ろ盾がない１歳ほどの赤子どう見てもブラウンシュヴァイク、リッテンハイムが絡んでいるとしか見えないんだ

よね。

フェザーン&地球教という可能性もルビンスキーが４８２年に自治領主に就任しているし前の自治領主は地球教の支持から逸脱して処分されている訳だし就任記念の実績作りに暗殺した可能性もあるな。ただあの時点では帝国同盟とも戦力はほぼ拮抗。所謂４８対４０対１２の状態でわざわざ帝国が滅ぶ様なことをしないだろう、後半のルビンスキーなら独自の判断でしただろうけどあの当時そんな力はないはず
しかし注意しておくことには手を抜かないようにしないと駄目だな。

しかし今日は私のご学友候補と顔合わせと家庭教師役やお姉様役の夫人や令嬢も来てるから会場に大輪の花が咲いたがごとくなり、その花に群がる貴族の子弟がナンパして居るみたいに見えるね。

私の所にはご機嫌伺いに来る方々の多いこと多いこと、腐っても皇帝陛下の権力は未だあるようです。
アマーリエ、クリスティーネ姉上達は既に売却済みで残りは私だけだからみんな来るよね。

各爵や軍の重鎮達や宮廷の廷臣達の子弟達がわらわらと来ては挨拶をしていくし挨拶し疲れます、帝国貴族だけで４０００家以上居るけどまあクロプシュトック候のようにハブされてる方々も居るから全部じゃないけどね。
まあ男児はご学友には成らないから将来の許嫁候補て感じだね。
さっき来たのはあのフレーゲル、来た瞬間ウゲッて思ったけど顔に出さないのが仕事だしね、『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございます、是非来年の視察ではエスコートさせていただきたく存じます』
とか言ってくるから適当に煙に巻いておいたよ。

ミュッケンベルガー元帥いやこの頃は大将の子息のフリーデグットさんは１４歳だけど大将ソックリな堂々とした体格で好感の持てる方でしたね。

おっ今度来たのはどっかで見た顔だけど誰だっけ？んトゥルナイゼン・・・ああのラインハルトの幼年学校同期生でへまやって精彩を欠いて閉職に回されたトゥルナイゼンか伯爵だったんだな、まあ普通にご挨拶っと。

今度はマールバッハ伯爵がロイエンタールを連れてきたよ、まあ伯父甥の関係だから有るんだろうけど、にこやかに『マールバッハ伯レオンハルトで御座います、皇女殿下にはご機嫌麗しく、此処に居るのは我が甥オスカーで御座います。先年は皇帝陛下皇女殿下には類い希なる栄誉をいただき祝着至極に御座います』

『マールバッハ伯が甥オスカー・フォン・ロイエンタールで御座います皇女殿下ご機嫌麗しく存じます』

「マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか」

「はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います」

こんな感じで挨拶するんだけどロイエンタールは嬉しくないんだよねきっと、女性に対して母親の増悪があるから。

オフレッサーとかは未だ此処に出られるほどの地位じゃないみたいで姿が見えない会ってみたいのに残念、いずれ装甲擲弾兵の閲兵を父様に頼んで連れて行ってもらおう、今年士官学校へは校長とシュターデンのせいで行けなかったのだから、せめて卒業式には参加したいな。

一休みして午後からはご学友候補のご令嬢方とのパーティーです。同じ歳だけどブラウンシュヴァイク公令嬢のエリザベートとかは来てないんだよね。

館で古典文学を教えて貰う講師としてベアトリクス・フォン・マリーンドルフ伯爵夫人が紹介されたんだけどヒルダのお母さんだよね？一緒に付いて来ている子供ってヒルダじゃない？
「ベアトリクス・フォン・マリーンドルフと申します、この度皇女殿下へ古典文学をお教えすることと成りました」
「ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフと申します以後お見知りおきを」
「よろしくお願いしますね」
ヒルダショートカットじゃない綺麗なロングじゃんいつ頃切ったんだろう。

お外の学校でも習うらしいだけど来た方が、ヴェストパーレ男爵夫人だったけど年取ってるよ似てるけど年増です、どうやらお母さんのようですね。
「マルグリート・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人で御座います、この度皇女殿下のご教育の一環として我が校の総力を挙げますのでご安心下さい」
総力なんか挙げなくて良いからさ適当にいこうよ＞＜
「マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレと申します以後お見知りおきを」
男爵夫人だこの美少女が芸術家の愛人を7人も囲う方になるのですね、メックリンガーに未だ会ってないのかな？今度聞いてみよう。

次から次へと教師役とお姉様役とのご挨拶が続いていよいよご学友登場か。
ケルトリング侯爵家のクラリッサ嬢、エーレンベルク元帥の曾孫のブリギッテ嬢、メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢と順番に紹介されていく5人いるそうだけど次の言葉にん？って思ったです。
リヒテンラーデ侯爵家エルフリーデ嬢？？？てか彼女刃物女じゃな

いか？うわーリヒテン爺さん養女にして入れてきたのかよ、刺されるのはいやだー！けど見た限り大人しくて可憐な美少女なんだけどな。
やっぱり家族殺されて極寒の流刑星に流されたのがやさぐれさせたんだな。
「皇女殿下私エルフリーデ・フォン・コーラあっリヒテンラーデと申しますよろしくお願いいたします」
間違えなんて可愛いじゃん彼女を不幸にしないように頑張ろう。

最後が・・・えっグリンメルスハウゼン子爵家のカロリーネ嬢・・・・・・グリンメルスハウゼン爺さんの縁者だよね、そうだよね？
「皇女殿下私カロリーネ・フォン・グリンメルスハウゼンと申しますよろしくお願いいたします」
えーと取りあえず後で聞けばいいか今日はグリンメルスハウゼン爺さん来てないみたいだし。
「私こそよろしくお願いいたします」
しかし爺さんこんな孫？いたのか。

まあ此で9月からは6人で勉強だ、科目が多くて憂鬱だね。

第十一話　刃物女とお友達（後書き）

明日から出張でＵＰ出来るか未定です。

第十二話　裏の事情（前書き）

出かける前に今日の分だけは更新、今夜は難しいです。

第十二話　裏の事情

帝国歴４７７年７月２５日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　ヨヒアム・フォン・フレーゲル

本日我が妻になるテレーゼ皇女のご学友お披露目会が開かれた、許嫁候補も居るだろうという輩も居るが其れは間違えだ、テレーゼ皇女の夫は私ヨヒアム・フォン・フレーゲル男爵以外には考えられないのだ。本日も謁見時『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございます、是非来年の視察ではエスコートさせていただきたく存じます』と言ったら、にこやかに接してくれたのだ。伯父上も全面的に協力してくれるから他の連中には負けはしないのだ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　フリーデグット・フォン・ミュッケンベルガー

祖父に連れられテレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加した本来なら幼年学校４年であるから授業があるのだが免除されたのだが、本来ならばミュッケンベルガー伯爵家の本家たる再従兄弟が出るのが普通なのだが既婚者なので私にお鉢が回ってきたようだ。どうやらお披露目会と将来の婚約者候補を絞り込むための会だったようだ。テレーゼ皇女殿下とお話ししたが可愛らしいかたであった。フレーゲル先輩がニヤニヤと自分の世界に入っていたようだが気にしないことにした。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　オスカー・フォン・ロイエンタール

マールバッハの伯父にどうしてもと言われ行く気がなかった不敬にあたると言われ仕方が無く皇女のご学友お披露目会なるパーティーに参加した。
仕方がなかったがパーティーに群がる無数の艶やかな花達、手折ってみたいと感じたが皇女への挨拶に連れられ挨拶をせざるを得なくなった。伯父だけ挨拶で良いだろうと思ったら俺に振ってきた『マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか』
はぁ！息災じゃないお前のせいで去年は散々だったんだぞと言えないから『はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います』と心にもないことを言ってきた。しかし伯父が又噂を流すかもしれないなんとかしてくれ！

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフ

お母様に連れられてテレーゼ皇女殿下のパーティーへ出席した、お母様が古典文学を教えるそうで私はお姉様役で遊び相手とかするらしい、テレーゼ様はにこやかでたいそう可愛く可憐なかたでした、今度会えるのが楽しみです。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

お母様の学校でテレーゼ皇女殿下のご教育をお手伝いすると言う

ことで、ご学友お披露目会に参加しご学友も観察するために一緒に参加した。皇女様は私顔を見ると一瞬ジーとみましたがすぐに笑顔で挨拶を返していただきました、9月からは私も参加する事になりそうですから頑張らなければなりませんね。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　エルフリーデ・フォン・リヒテンラーデ

緊張するな、7月になっていきなりリヒテンラーデ大叔父様から父に私を養女に欲しいと連絡があった何でも皇女殿下のご学友として私が選ればれるそうでビックリした、今日初めて皇女殿下にお会いしてご挨拶したけど、いきなり自己紹介で名字を間違えるんて恥ずかしいよー皇女様は変に思わなかったか其れが不安だよ。けど優しそうなかたで良かった9月からが楽しみです。

■オーディン　某所

「今宵のパーティーは如何でございました」
「小娘の学友選びと婚約者候補選びが茶番だったな」
「そうでございますか」
「うむいくら教師が良くても役に立たん知識ではどうしようもあるまえ」
「御意」
「其れよりあの女の流産はどうした」
「あの者からですと自然に流産させないと怪しまれる為特殊な薬を使うとの事です」
「急がせよ」

「御意」

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加したカロリーネが帰ってきた。
「カロリーネご苦労であった」
「はっ御屋形様」
「テレーゼ様はいかがであった？」
「御屋形様の仰る通り皇帝陛下と同じかと」
「やはりな、自分をお隠し有られる方か」
「御意」
「兄も暗殺され自らも生まれながらに暗殺されかかったお方じゃ陛下と同じ様に成られるのも判る気がするの」
「御意」
「カロリーネ済まんの無理を言って」
「何を仰います御屋形様、私のような者を養女として育てていただき何不住無く居られるのも御屋形様のお陰にございます」
「此から辛かろうがテレーゼ様を守ってくれ」
「御意」
「カロリーネあまり鯱張るでないぞ」
「御意」

第十三話　退屈なる日々（前書き）

相変わらず遅い時間経過。

第十三話　退屈なる日々

帝国暦４７７年８月１５日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　桃珊瑚の間　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日９月からの勉強で宮殿内からヴェストパーレ男爵家が主催する学校へ通うための侍従武官との初顔合わせが行われるのです。お母様は私が外の学校へ通うのは前代未聞だと反対したのですが、お父様が世間を見るのもよいことじゃとお母様を説得し（お父様がお母様のところへ通う回数を増やす約束をしたらしい）週２日通う事に決まり残り２日は館で勉強し１日は見学等の野外学習日で残り２日が休日という感じになるそうだ。

女官に連れられて部屋に入ると既に４人の男女が待っていました。男性２人女性２人で身のこなしから相当な腕の持ち主ではと感じました。

最初にリーダーらしき３０代に見える男性から挨拶がありました。

「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官に任命されました、クレメンス・ブレンターノ大佐で有ります」

続いて２０代ぐらいの男性が「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ハインリヒ・フォン・ヴィッツレーベン大尉で有ります」

それから２０代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、マルティナ・フォン・バウマイスター中尉で有ります」

最後に同じく２０代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗

しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ヴァーリア・ディーツゲン少尉で有ります」

４人から丁重に挨拶がされました。こちらも此から命を預ける訳ですから丁重にぺこりとお辞儀をしながら「テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです、此から苦労をかけると思いますがよろしくお願いいたします」

あまりの丁重さと腰の低さに驚いているようです。普通皇族どころか貴族もこんな態度取らないよね。

まあ最初が肝心ですし嫌々守られるよりは愛想良くしておいた方が良いじゃないですか。へんな貴族の紐付きだったら嫌ですけどね、その辺は追々判るでしょう。

顔合わせが終わって４人が退席したので自室に帰って何となくボーッとしながら考え事。

今日は日本じゃ終戦記念日かぁもう日本もないし関係ない日になってるんだけどね、元日本人としてはしみじみする訳ですよ、甲子園も高校野球もない夏の日。

スイカが食べたい気がしますね後で侍従長にスイカがないか聞いてみましょう。

そう言えば来年に第４次イゼルローン攻略戦が有るはずですが原作に載って無いので判らないんですよねＯＶＡでアキレウス級旗艦戦艦がトールハンマーで沈むシーンが出てますが、トールハンマーで沈んだアキレウス級旗艦戦艦は記録上無いので４７８年に戦没したらしい第４艦隊旗艦アキレウスが該当するんじゃないかと言われてましたからね。けれども来年イゼルローン攻略戦が有るとは言えませんしね、何か手は無いですかね。

そう言えば同盟の大規模戦闘のパターンは評議会選挙の年統合作戦本部長改選の時に活発化ましたね、帝国領侵攻作戦が前者でしたし、

ヤンのイゼルローン攻略が後者でしたね。
同盟の選挙と改選のパターンさえ判ればかなり正確に攻撃がわかるのでは無いでしょうか、研究する価値はありそうですね、問題は一人でしないと行けないと言うことで時間が足りないし資料が集まるかどうか、せめて軍務省と統帥本部の協力は欲しいが、あまり動き回るのも駄目だし・・・ん・・・困った知識も宝の持ち腐れだよ。
カロリーネと学友になれたからグリンメルスハウゼン爺さん家に遊びに隠れて会いに行って相談するかな時間いつが良いんだろう本人に聞かなきゃ駄目だから暫くはむりだな。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋

「グリンメルスハウゼンその娘がカロリーネか」
「陛下そうでございます」
「カロリーネ、テレーゼはやはり儂と同じか」
「皇帝陛下皇女殿下は韜晦なさっております」
「鯱張らずに喋るが良いぞ」
「いやしかし恐れ多い事なれば」
「良いのじゃ儂は堅苦しいのは嫌いでな」
「カロリーネ此から陛下には直接度々連絡をするのだからそうせい」
「はっ陛下」
「未だ堅苦しいぞハハハ」
「してグリンメルスハウゼン今回付けた護衛はどうじゃ？」
「私の部下から選りすぐりの者を選びました、ケスラーは私の代理ですので動かせませんが、ブレンターノ、ヴィッツレーベン、バウマイスター、ディーツゲン４人とも腕利きでございます」
「女官も４人紛れ込ませております」
「他には？」
「外出時には装甲擲弾兵出身者からなる護衛部隊を２個小隊用意し

ております」
「１００人か見事じゃの」
「しかし油断は禁物でございます」
「うむ、カロリーネご苦労じゃがテレーゼを頼むぞ」
「もったいないお言葉でございます」
「これ。またじゃな、ハハハ」
「カロリーネご苦労」
「陛下失礼いたします」

「さてグリンメルスよ幼年学校のあの者はどうして居る」
「はい成績は優秀であります共に連れて行った赤毛者も成績優秀でございます」
「ほう思わぬ拾い物であったか」
「そうですな、しかし」
「どうしたのじゃ？」
「あの者達校内でも孤立しており度々喧嘩沙汰を起こしており、さらに姉の悪口を聞くと逆上し石で相手の頭を殴り続けました、幸いにも死者は出ておりませんが問題になっておりまして、放校の可能性も出ております」
「うむその辺は儂が姉に頼まれたとして事を荒立てないよう伝えさせよう」
「そうでうすな陛下」
「しかしあの者がどう化けるか楽しみよのフフフ」
「グリンメルスよ此からも頼むぞ」
「御意でございます」

第十四話　退屈なる日々その２（前書き）

すみません、今回話の関係上凄くつまらないです。

第十四話　退屈なる日々その２

帝国歴４７７年９月１日

■オーディン　　テレーゼ・フォンゴール・デンバウム

本日より憂鬱な授業が始まります、夏休み明けなのに宿題未だ出来てない心境です。
いやね歴史、科学、国語、数学、語学、とかの実用な物は良いんだよ、けど貴族のたしなみお香当てやお茶のブレンド当て（伊藤園にでも勤めるつもりか？てかヤンにやらせれば１００点じゃねー？）とか実用的じゃねーーーーーーーーー！

通うために用意された地上車を見ればあくまで外見は普通の車の様に見えるんだよね外見はさ・・・・・でもさーサイズがでかすぎ戦車みたいな大きさなんですこれ、乗ってみると又々冗談かと思うような装甲板ですガラスも厚いです後で聞いたら戦艦用装甲板の流用だそうです・・・てかさ其処までしないと外出られないなら出ること無いんじゃねーの？と思うが皇女じゃあ仕方がないかぁ。

んで朝7時に起きてお母様と朝食後身支度をしたらお出かけです、ただねーノイエ・サンスーシってだだっ広いから町へ出るまで４０分かかるので飽きるよね、出れば２０分で着くのにですよ、宮殿内だけでもヘリでも使いたいですよね。

９時にやって来ました、ヴェストパーレレ家の学校へ皆さん来てらっしゃいます、因みに学友５人と共に学園長たるヴェストパーレ男爵夫人にご挨拶です。

早速の授業は無いですが此行われる教育の方針とか何を習うとか先生はどなただとか淡々と説明されていきます。
其れが終わると懇談会で先生方と我々生徒達が雑談します、お菓子を摘みながら紅茶で喉を潤す、んー良いねこのままなら良いんだけどね、明日から地獄が始まるのだね。

其れで2日目早速文学の勉強ですか、まあ良いですけど。美術の勉強ですね教師を見るとメックリンガーじゃないですね普通のおばさんです、未だ娘さんはメックリンガーは未だ付き合ってないようですね、8人も愛人居るなんて親が聞いたら泣くよねふしだらな娘ですって、まあそのうちメックリンガーを連れてくるんだろうねその時が楽しみです。
夕方はみんなでお茶会明日は用事がないのでお休みです。

本日は何もやることがないのですよ、仕方がないので作戦を考えましょう。
どっかオーディンへのルートの惑星にグランドキャノン作れないかなと妄想、金と時間がかかりすぎて没、
移動要塞で機動防御だとガイエスブルグで失敗検討を求める、んーろくな事が考えつかんなこんな日はやめよう。

今日明日は宮殿で習い事です、学友が来てダンスにお花にお香にお茶に歌とオペラ鑑賞。
あああくびが出ますね、習いたいことが全然出来ません。
歴史と科学と軍学とか習いたいのですが駄目ですね、お父様に相談するか迷いますね。

休みの日です今までは毎日が休みでしたが休みが減った割にはやることが有りません退屈です。
いっその事何処かへ行きたいのですが母様は妊娠中父様は謁見で暇

がないそうですタイミングが悪いですね、誰かの家に行こうにも先に連絡して準備をしないと駄目なので時間がありませんでした、次回からはちゃんと連絡をしておきましょう。

帝国歴４７７年１０月

■オーディン　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

９月から始まった勉強も一ヶ月が過ぎ少しずつ落ち着きを得て来ました。

週１回のペースで順番に学友の家にお呼ばれし同じように週１回で館へは５人全員を呼ぶ形で過ごしてきました。

最初にリヒテンラーデ侯爵家へ行きましたよ、流石国務尚書の家ですね立派です凄いですね、まるで美術館のようです訪ねると侯爵自ら出迎えてくれましたよ。この人映像で見るとスゲー悪そうに見えるんですよね、ところが我々を迎えるときには笑顔なんですよ不気味ですね。越後屋とか似合いそうな感じがして少し笑いそうになりましたよ。　エルフリーデは映像を見た感じと全然違って優しいよい子ですから可愛くて仕方有りませんからロイエンタールの毒牙から守ってあげたいですよ。リヒテンラーデ侯とも話をしたいけど今の年齢じゃ駄目でね何とかしたいのは山々だけど年相応の対処しかできないです。

次がケルトリング侯爵家この家は武人の家系ですからね同盟のブルース・アッシュビーにボコボコにされてから家運が傾いたんですが、ミュッケンベルガー伯爵家とのつながりは非常に強いですからねその筋から復活しようと頑張ってるんですよね。やはり当主のケルトリング少将がお出迎え、雰囲気からして前線方の武人に見えま

すね、ただ此処も同じで話を殆ど聞くことが出来ないんですよね、折角の現場の声が聞こえないもどかしかが残念です。

メクレンブルク伯爵はごく普通の門閥貴族で大げさでなんかランズベルク伯を思い出しましたよ、可もなく不可もない極点的な門閥貴族ですね。相談等はしてもしょうがないタイプふむ員数あわせで集めたような人材だね。

エーレンベルク元帥は子爵です、元帥本来は仕事だけど皇女が来るというのでお出迎えしてくれました、きっと帰ったら書類の山でしょうすみませんね。此処でも当たり障りのない話ばかりで終わってしましました。やっぱ1対1じゃないと話せないね。

やって来ました、苦節6年8ヶ月会いたい会いたいと思っていた、グリンメルスハウゼン子爵家へ今日突撃です。ワクワクしますね到着するとグリンメルスハウゼン子爵とカロリーネがお出迎えしてくれました。おおっ初めて見るがこの頃確か67歳ぐらいか未だ未だ元気に見えるこの老人が彼のグリンメルスハウゼン文書を遺した訳ですね、今回は誰がその文書を手に入れるんだろうか気になるね。

早速ご挨拶「この度はお宅にお呼びいただきありがとうございます」
「皇女殿下には我が館に行幸頂き誠にありがとうございます」
よし此でアポの準備ぐらいは出来たね、後はどのように話をするチャンスを作るかだね。
カロリーネさんは控えめな性格で表に出てこないタイプですね。お爺さんと一緒で目立たぬような感じですよ。

こうして9月から始まったお宅訪問は順当に進んでるです。

第十五話　暗雲（前書き）

書いてて感情移入してしまった。

第十五話　暗雲

帝国歴４７７年１２月

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

グリンメルスハウゼン爺様に初遭遇してから既に３ヶ月近くその後会いに行っても軍務や領地へ行っているとかで全然会えません、こりゃ困った避けられているのでしょうか。カロリーネに聞いてもちょうど都合が悪いらしいですと言われています。何とかせねばあかんな。

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　小部屋

「グリンメルスよテレーゼに会ってやらんのか？」
「今少し資質をみております」
「そちが見て後どのくらいじゃ」
「年明けにはよいかと」
「どのような事を聞きたがっておるのじゃ」
「カロリーネによると陛下の若い頃の話を色々聞きたいからと仰っているそうです」
「ふむあの頃のことか」
「ですなあのころのこでしょう」
「父の威厳は大丈夫かの」
「陛下のお心もテレーゼ様なれば判りましょう」
「まあそうじゃの」
「恐らくその話は口実でありましょう、相当に政治、歴史、軍学などに興味を持たれておりますからそちらの話がメインかと存じます」

「これは楽しみじゃ逐次伝えるように」
「判りました」

「シュザンナの方は大丈夫か」
「こちらも手練れを付けておりますれば」
「うむ頼むぞ」
「はっ」

帝国歴４７７年１２月２４日

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日はクリスマスです。この時代にもキリスト教は廃れたようですがクリスマスは有るのです不思議だね♪
お母様は臨月なので参加せず、宮殿でパーティーよりはヴェストパーレ男爵邸でパーティーをすることにしました。
在校生や教え子さん達が皆さん着飾って来ています、男性は居ないです女だけのパーティーです。
クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃんみんなかわいく着飾っています、話すことは誰それの御曹司は格好いいとか誰それは嫌だとか、かしましいですよ。ヒルダさんもマグダさんも来てますから話が弾みます。
聞いているとヒルダさんこの頃から真面目ですね、マグダ姐さんはこの頃既にパトロンを考えているような口調ですね早い早いですね。
９時までパーティーしてお開き大人の方はこれからご用があるそうです、知ってますけどね、子供はおとなしく帰りますよふふ。

帝国歴４７７年１２月２６日

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

クリスマスから2日後、本日お母様の出産予定日です。今までなら何らかの妨害が何者からか行われてきたのですが今回はそれに鑑み身元のしっかりした者を付けていましたので安心できるそうです。大きなおなかで辛そうなお母様は先ほどから陣痛がして分娩室へ入って行かれました、私のこともありますので出産後の処置に3人が入り処置するそうです、此なら相互監視が出来ますから安心ですね。

分娩室に入って2時間あまり経ちますが未だに出てきません心配です。

3時間ほどでやっと出てきましたが、侍従長の顔色が悪いです。

「まさかお母様が何かあったのですか？」

「いえ侯爵夫人はご無事ですがお子様の方が・・・・・」

「子供がどうしたのですか？」

「お生まれに成ったのですが呼吸をしておらず懸命の処置も虚しく先ほどお亡くなりに成りました」

「え・・・・・・・」

えっ死んだ・・・・死んだ・・・・何で何で・・・何でこんな所だけ原作と一緒になるの！！

そんなそんなこの子は無事に生まれてきて育つはずじゃなかったの。みんなで守ろうとしたのに何で死んじゃったの・・・・・辛いよ辛すぎるよ幾ら原作がそうだからって、生まれる前から死を宣告されているなんて酷すぎる。あまりに無情すぎるよ！

殺されたんだきっと、兄上みたいにそして私みたいに殺そうとして殺されたんだ！！

ブラウンシュバイクかリッテンハイムかフェザーンか地球教か誰に

しても許さない絶対許さない必ず敵を討つ！！
みてやがれ奴らを地獄の底へ追い詰めてやる！！
自分らの犯した罪を思い出すがいい！！

「皇女殿下がショックで興奮しておられる女官はお連れして差し上げろ」
「皇女殿下さあ行きましょう」
「けどお母様が・・・！」
「ご心配をお掛けしては反って侯爵夫人に障ります」
「判りました」

部屋に帰ってきて一人にしてもらい、この世界に来て初めて思いっきり泣きました、初めて出来る弟か妹大事にしたいと思ったそれなのにそれすら許されないこんな世界の皇帝一家って辛いよね。
会えなかった弟か妹天国で幸せになってね。必ず敵はとるから見守っていてね。

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

3人目の御産ですから楽に出来ましたが、生まれた子を見て思わず天を呪いたくなりました。子供は奇形児だったのです、私が悪いのでしょうどうすればいいのか途方に暮れ自分を責めました、目に浮かぶのはテレーゼの笑顔ですこの様な劣悪遺伝子を持つ私がテレーゼの母親として一緒にいられる訳がない、ルドルフ大帝時代であれば母娘共々死を賜るはずです。
たとえ今の陛下でも私はテレーゼと引き離されるでしょう。テレーゼの為ならこんな母親は居ない方がいい死んでしまいたい、丁度手術台上にメスがある、テレーゼこんなお母さんを許しておくれ。

幸せに暮らすんですよ・・・私の大事な大事な可愛い可愛いテレーゼ・・・・・

「きゃーーーーー侯爵夫人!!」

第十六話　蜉蝣の命

帝国歴４７７年１２月２６日

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　フリードリヒ４世

シュザンナが本日儂の子を出産する、テレーゼが生まれて６年又儂の子が出来るとは、帝国を滅びへ向かわせるこの儂に。
出産時には間に合わなかったが３時間後に分娩室へしかし奇形児が生まれシュザンナがショックを受けていると聞き急ぎ向かった。直ぐさま部屋に入ると『きゃーーーー侯爵夫人！！』と悲鳴が聞こえ見るとシュザンナがメスを右手に持ち自らの喉を突こうとしていた。
儂は無我夢中でシュザンナの手を握りしめた、その際手のひらが切れたが、そんなことは気にならなかった。

「シュザンナやめるのじゃ！」
「陛下お止め下さりますな」
「馬鹿なことはするではない」
「テレーゼ・テレーゼの為でございます」
「テレーゼの為じゃと？」
「私のような劣悪遺伝子の持ち主が母親ではあの子が不憫です」
「その様なことはない！」
「いいえあの子の為です」
「違うのじゃシュザンナ、違うのじゃ」
「は？」
「まず落ち着くのじゃ、そして儂の話をよく聞くのじゃ」

女官達が席を外していくの、グリンメルの手の者達じゃな
「良いかシュザンナ今回の事はお前のせいではない」
「そんなお慰めを・・・・」
「違うのじゃ、此はゴールデンバウムの血なのじゃ」
「陛下のお血」
「そうじゃルドルフ大帝以来ゴールデンバウムの血は汚れ続けてきた、代々死産、奇形児、異常者などが多数出てきて居るのじゃ、だからシュザンナおぬしのせいではない」
「しかし」
「儂の子の内４人は流産、９人は死産、９人が成人前に死んでおる、儂の兄弟も７人が病死じゃ、ゴールデンバウムの血は濁り生命力が衰えておるのじゃ」
「しかし私の血にも有るやも知れません」
「テレーゼを見よあの子は五体満足で何不住無い体で生まれてきたではないか、これがシュザンナお前の功績じゃ」
「陛下」
「テレーゼの為にお前は必要なのじゃ母親を失ったとしたら、どれだけ悲しみ傷つくであろうか、そんなことをするでない」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
「陛下判りました、テレーゼの為に私は生きます。テレーゼを守り慈しむます」
「判ってくれたかシュザンナ」
「はい陛下、あっお手が」
「よいよいシュザンナが無事だったのじゃこんな傷何ともないわ」
「お手当をせねば成りません」
「たれぞ陛下のお手当を」

「さて、シュザンナよ。テレーゼが非常に興奮しているそうじゃ、此から参ろうぞ」
「陛下お供いたします」
「親子三人で語ろうぞ」

帝国歴４７７年１２月２６日

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ちくしょうちくしょうワンワン泣いていると、女官がお父様とお母様が会いに来てくれたと伝えに来てくれた。お父様とお母様が来てくれた、悲しいはずなのに来てくれたすぐに会いたい、走って出て行った。

「お母様ー、お父様ー」
「テレーゼー」
「テレーゼよ」
「お母様、お母様赤ちゃんが赤ちゃんが・・・・」
「テレーゼ残念だけど駄目でした」
「殺されたのですね！」
「テレーゼ其れは違うぞ」
「お父様違う訳無い！」
「テレーゼ本当に違うのよ」
「お母様まで悔しくないのですか！」
「テレーゼ落ち着きなさい、そしてよく聞きなさい」
「お前には辛いかも知れんが、此はゴールデンバウムの宿痾なのじ

や」
「宿痾？」
「そう長い間溜まり溜まった悪いところじゃ」
「悪いところ」
「幼いお前には辛いが、我々の血では赤ん坊が育ち辛いのじゃ、そのため今回の子も死んでしまったのじゃ」

「テレーゼご免なさい貴方に弟を生んであげられなくて」
「お母様が悪いんじゃない」
「お母様もお父様も悲しいんだから、三人で赤ちゃんが天国で幸せになれるようにお祈りしようよ」
「テレーゼそうですね」
「テレーゼそうじゃな」
「今日は一緒に寝ましょう」
「お母様お体は大丈夫なのですか」
「大丈夫ですよ」
「儂も一緒で良いかな」
「はいお父様」
「身支度をしましょうね」
「お父様お母様　、だいっすき」

　両親と寝る準備しながら今回のことを考えていた。
今回は本当に死産だったのか、怒り狂ったがお父様お母様が違うといってくれた、可哀想な弟よ天国で幸せにしておくれ。
ゴールデンバウムの血か、確かに遺伝子異常が多い系統だし生命力が弱っているのか。お父様お母様を悲しませ無い為に私がしっかりしないと、今日は怒りに任せて切れてしまったけど、命を守る為に冷静さを強化しないと駄目だ。
「テレーゼそろそろ寝ましょう」

「はーぃお父様お母様」

■オーディン　某所

「ハハハハハようやった」
「あの者見事に任務を成功させてくれました」
「そうよ、一時は失敗したかと思うたが見事にやってくれた」
「流産を狙いながら其れが失敗したときの為に奇形児と言う次作を行っておりました」
「奇形児とはゴールデンバウムの血のなせる技か？」
「其れもございますが、フェニトイン、プリドミン等の薬を使うと奇形児率が非常に上がるそうでございます」
「なるほど其れは此からもつかえるの」
「御意」
「あの者には此からも逐一繋ぎをするようにせよ」
「御意」
「ハハハハハアーハハハハ」

第十六話　蜉蝣の命（後書き）

黒幕が動いていました。

第十七話　グリンメルスハウゼン子爵（前書き）

やっとグリンメルスハウゼン子爵の話に、ヤンが出るのはいつの日か。

第十七話　グリンメルスハウゼン子爵

帝国歴４７７年１２月２７日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　ベーデミュンンデ侯爵邸　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

昨日は悲しいことがありました。弟が生まれそして死にました。取り乱し酷い状態でしたが父様母様によって慰められ勇気付けられました。今日から又頑張ろうという気力がわいてきました。

朝起きると父様母様が見守ってくれていました嬉しかったです。小声で父様が『テレーゼや此からのことを思うのであれば年明けにもグリンメルスハウゼンに会ってきなさい』と言ってくれました。私は『はい』と返事をしました。

その後支度をして朝食を食べながら赤ちゃんのお墓はどうなるのと聞くと皇室専門の墓地に埋葬されたとのことです、早いと思ったら生きられなかったので早く天国へ送ってあげるとのことでした。そんな風習があるのかと思いました。

取りあえず午後にお参りに行き冥福を祈りました、人生ってむなしいね。

帝国歴４７８年１月１日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

新年になりました。今年こそは良い年でありますようにと大神オ

ーディンに祈りました。
さらに元日本人として初日の出を見ながら天照大神に祈願しました。

新年ですので身支度をした後いつもの通り、黒真珠の間で新年パーティーです。
喪中の習慣がないのか或いは帝室としての義務でしょうか、父様は若干思い込んだような顔で笑顔を無理に作って居るようです。
私としては欠席したいのですが義務ですから仕方がありません。いくら転生者でも今の六歳児の精神がメインですので、身近の死にはメンタル面で非常に辛いです。
皆さん王子死産を知っていますが、さすがは貴族神経が図太いからライバル死んで嬉しいのか、全然平気で談笑してますよね。
兄上は軽いため息を吐きながら談笑に応じています。

マグダ姐さん、（いやねお姉さんと言うより姐さんじゃないかと我ら6人組では呼んでるんですよ）とヒルダお姉さんが来てくれて慰めてくれます、因みに敬語は止めてと言ってるんですが、正規の時には矢張り敬語なんですよね。

「皇女殿下この度はご心中お察しいたします」
「男爵令嬢お心遣い痛み入ります」
「皇女殿下のお心を思うと胸が痛みます」
「伯爵令嬢お心遣い痛み入ります」
取りあえずの社交辞令をして少し離れた所で雑談。
普段は敬語なしでお願いしているのです。

「弟さんは残念な結果だったわね」
「死産だそうですね」
「そうなのです、外因的なことを聞いたのですが正真正銘の死産だ

と母から聞きました」
「気を強く持ちなさいね私も出来る限りのことをしますわ」
「私もお手伝いできることはします」
「お姐さん、お姉さんありがとうございます、頑張りますんで今年もよろしくお願いいたします」
「ええ今年もよろしくね」
「今年もよろしくおねがいします」

「そう言えばお姐さん、グリューネワルト伯爵夫人とお友達になったそうですね」
「ええアンネローゼがみんなから爪弾きにされて気の毒で母性本能を擽られましたわ」
「伯爵夫人はどのようなお方なのですか」
だいたい原作で知ってるけどね、男爵夫人の見識を聞きたいのがね。
「私も聞きたいですね」
「彼女は凄く大人しくて物静かで優しく料理も上手よ」
「綺麗な方ですよね」
「そうですね」

「テレーゼ様～」
「クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃん」
「今年もよろしくおねがいします」
「今年もよろしくおねがいします」

ワイワイしながら新年は始まっていったのです。

帝国歴478年1月7日

■オーディン　　テレーゼ・フォンゴールデ

ンバウム

今日この瞬間こそ待ちに待った時、父様が会いに行けと勧めてくれたのだ全身全霊をかけ力を見せよう。果たして鬼が出るか蛇が出るか、グリンメルスハウゼン爺さんの裏の顔が有れば正体を見せてもらえるか正念場だ。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

本日テレーゼ様と初めて会談する、私が見てきた限りテレーゼ様は大器だ。年齢不相応の冷静さ知恵も有り機敏も効き政治経済歴史軍学等に多大まれなる興味を引いている。この姿は幼き頃の陛下を彷彿とさせるものじゃ、儂も久々に朝から興奮しておる新たな昇竜を見つけたのかも知れんからな。
テレーゼ様がいらっしゃったのお手並みを拝見させて貰いましょうかの。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

「皇女殿下このような老人の元へ行脚頂き名誉この上なき事、誠にありがとう存じます」
「グリンメルスハウゼン子爵この度はお招き頂き誠にありがとう存じます」
「ささどうぞ」
「痛み入ります」
ふむ普段と違う客間に通されたわ秘匿の意味がある訳だね。

「皇女殿下におかれましてはこの老人に何をお聞きに成られたいのでしょうか？」
「父様の若き頃の思い出話をして頂きたくて参りました」
「皇帝陛下のお話でございますか」
「そうです」

「皇帝陛下は若かりし頃よりご聡明であらしゃりましてございます」
「そうでございましたか」
「皇太子時代においいても其れは其れはご立派でございました」
ふむ試してますね、目が面白そうに見えますよ。そろそろ聞きますかね。

「そうですね若き頃は優秀な兄、才気に富む弟の間で無気力凡庸愚物として自身を韜晦なさっていたのですからね、その為に町の飲み屋の店主に借金を作り皇帝次男が土下座したんですから、天晴れとか言いようがありませんよね、其処まで出来るお父様を尊敬しております」

「・・・・・殿下」
言い過ぎですかね。
「そろそろ相談相手が欲しかったのです、腹を割ってはなせる相手が」
「其れが私だと仰るのですか？」
「もちろん、父からグリンメルスハウゼン子爵へ会いに行けと勧た事もありますが、宮廷や貴族の噂話や動向を長年にわたりお調べしているとかなんとか」
「さようでございますか」
「そろそろお互い猫をかぶるのは止めませんか」
「・・・・・・」

「・・・・・・」
お互いで睨めっこです
「ふふふふふ」
「ははははは」
「殿下には負けましたわ」
「勝ちましたね」
「して何をお聞きしたいのですかな」
「グリンメルスハウゼン子爵貴方は父の影の部門を取り仕切って居ますよね」
「はてさて」
「ここへ来ても知らんぷりですか、色々なスキャンダル等を調べてらっしゃるそうですわね」
「ふむ、よう知っておられますな」
「宮廷内で話を聞いていて次第に判りましたよ」

「さて殿下はこの老人に何をさせたいのですか」
「取りあえずは」
「第一に父が華麗に滅べは良いと考えていた帝国再生準備における人材確保」
「第二に帝国内部の叛乱勢力の確定及び内部への浸透」
「第三に叛乱軍に対しての軍とは別の情報組織の整備」
「第四にフェザーン対策」
「第五に皇族の身辺警護、私は生まれたときに暗殺されかかってますからね」
「取りあえず今の年齢ではこのぐらいが精一杯でしょう」

「殿下流石ですな。とても6歳には思えない考えです」
「できますか」
「できましょう、陛下よりも殿下の好きにさせよとのお言葉を貰っ

ておりますから」
「グリンメルスハウゼン子爵此からよろしくお願いいたしますね」
「この老人残りの人生のすべてを殿下に捧げましょうぞ」
「今日は有意義な日でした。其れと殿下では無くテレーゼで良いです」
「ではテレーゼ様今宵は良き日でございました、お気おつけて」
「では失礼いたします」

よっしゃ矢張りグリンメルスハウゼン子爵はスパイマスターだった原作じゃ其れらしい描写がありありだった物ね、其れを言う訳にはいかなかったけど何とか出来た。父様感謝でございます、此から忙しくなるぞ、人材確保が第一だラインハルトに取られてたまるかこっちが先取りだー！

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

今宵テレーゼ様と話してみて先ほどの感が間違いで無いと身にしみて判った。
まさにあの才気韜晦具合正しく陛下の御血を色濃く引いておられる。
あれほどとは思わなんだ若干６歳とは末恐ろしいぐらいじゃ。
男児であれば確実に皇帝として中興の祖となれる素質じゃ。
しかし男児で有れば今この世には居ないじゃろう、女子に生まれたのは天の采配としか思えん。
此から短い人生精一杯陛下とテレーゼ様の為に誠心誠意尽くそうぞ。
早速明日にでもケスラーと話し合わんといかんの、出来るだけ早く陛下と話もしなければならん。
忙しいが面白い年になりそうじゃ。

第十七話　グリンメルスハウゼン子爵（後書き）

第五次イゼルローン攻略戦、エル・ファシルの戦い、帝国領侵攻作戦のプロットは出来てるのに其処まで話が行かない状態、果たしていつになるやら。

第十八話　それぞれの新年（前書き）

亀のような歩みです。

第十八話　それぞれの新年

帝国歴４７８年1月８日

■オーディン　　グリンメルスハウゼン子爵邸

「ケスラー大尉来たか」
「閣下お呼びだそうで、本日は何を」
「昨日テレーゼ様にお会いしたのじゃ」
「皇女殿下とですな」
「テレーゼ様は睨んだ通り、いやそれ以上の逸材だったわ」
「閣下それほどのお方ですか」
「そうよあの年齢であの知謀冷静は陛下以上じゃ、楽しみじゃわ」
「して我々はどの様な対応を」
「我らは全面的にテレーゼ様をご支援いたすのじゃ、各リーダに通達行うのじゃ」
「はっ、では幼年学校の方はいかが致すのですか？」
「あの者の動向は今まで道理に逐一記録し探るようにせよ」
「しかし宜しいのですか、あの者の危険な言動を陛下とてお知りでしょうに」
「陛下は知っていて敢えて目を瞑っておられるのじゃ」
「其れは又どの様なお考えで」
「陛下のお考えは追々判るであろう」
済まぬのケスラーいずれ明かすときも来よう。

「来週テレーゼ様と会談するで、ご要望に添った資料を集めよ、そしてケスラー貴官も同伴せい」
「はっ準備を整えます」
「此から益々忙しくなるぞ心せよ」

「はっ」

帝国歴４７８年1月8日

■オーディン　　幼年学校寄宿舎

「キルヒアイス聞いたか」
「何をでしょうかラインハルト様」
「あの男の寵姫が男児を死産したそうだ」
「それはなんというか」
「キルヒアイス愉快だな、あの男は姉上を奪い取ったのだ、その報いに子を取られたのだから」
「ラインハルト様・・」
「子だけではない、いずれあの者のすべてを奪い取り惨めな死を与えてやろう」
「ラインハルト様お声が聞こえてしまします」
「キルヒアイスは心配性だな」
「ラインハルト様」

帝国歴４７８年1月8日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　グリューネワルト伯爵邸　アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

新しい年が始まり私がここへ来て最初の新年でしたね、去年までならラインハルトとジークが居てくれて楽しい年明けでしたのに・・・ラインハルトやジークは風邪など牽いていないでしょうか心配です、けれどラインハルトやジークを呼ぶ訳にもいきませんし、マグ

ダレーナとドロテーアとお茶会でもしましょう。

帝国歴４７８年1月８日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

昨日のグリンメルスハウゼン爺さんとの会談で全面的な支援を約束して貰い一先ず安心です。
来週も会談しその時に必要な人材組織資金等の大まかな流れを決めるつもりですので、人材については原作知識をフル動員しながら転生者とばれぬように、如何にも偶然を装って決めていかないと危険ですね。

ラインハルト元帥府の主要メンバーとかは確実に引き込まないと駄目ですね、どうやら父様はラインハルトにも期待しておられる様なのである程度まで、ラインハルトが出世するのは此方も黙認ですね。

取りあえずはミッターマイヤーとロイエンタール、ミュラー、メックリンガー、ケスラー、アイゼナッハ、ケンプ、ファーレンハイト、ルッツ、ワーレン、ビッテンフェルト辺りか。Ｍｒレンネンは要らねー、義眼はうちの家憎んでるし猛毒だから生理的に拒否したい、そうそう忘れちゃ行けないメルカッツ、陸戦じゃ原始人かリューネブルクだけど危険が一杯なんだよな、閣僚じゃシルヴァーベルヒ、リヒター、ブラッケ、オスマイヤー、マインホフ、ブルックドルフ辺りを引き抜きたいな、そうなると領土がないと実験不可能だな、どっかの星貰えないかな。

バイエルラインやベルゲングリューンとかも超必要だし補給のベテランも絶対要るな、けど原作じゃ同盟のキャゼルヌ先輩かシンクレア・ゼップだったけか？しか思いつかんぞ。
ともかく来週の話し合いからはじめなきゃ駄目だね。

帝国歴４７８年1月8日

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

新年最初の授業が終わった、人の噂も七十五日と過去の偉人は言ったそうだが其れは嘘だと断言できる。既に1年半経つが未だに思い出したくもないあの事件の為に親衛隊からは目の敵にされ、女どもからも敬遠されまくっているのだから堪らん状態だ。マールバッハの伯父も相変わらず無茶振りをしてくるし、最近は自分の娘俺の従妹に当たるリヒャルダと結婚させ跡継ぎにしようと企んでいるらしい。皇帝陛下の愛娘の皇女殿下の覚え目出度い若手士官としての名声を望んでいるようだ。
冗談じゃないあの娘のお陰で散々だったんだ、あれは俺にとっての疫病神だ災厄の女王と言っても良いだろう、あと半年か早く卒業したい卒業して一刻も早くオーディンから離れたい離れるんだ！！

第十九話　ロリとの遭遇（前書き）

続きは第二十話です。
これから仕事行ってきます。

第十九話　ロリとの遭遇

帝国歴４７８年1月１４日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

グリンメルス爺様との会談から、一週間待ちに待ちましたいよいよ今日から爺さん達と悪巧みの開始です。

爺様の館へ向かうといつもの小部屋へ案内されました。相変わらずの日向ぼっこ提督とはとても言えないシャッキリした姿勢で迎えてくれます。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」

「グリンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

爺様は考えながら一言。

「グリンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」

ふむ頭の回転とかも試されていますね流石です。パット考え。

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」

爺様目を細めて。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしくお願いしますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

爺様はふむふむと満足そうにうなずいている。

「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」
ニヤニヤしてますね、ものすごく楽しそうだ。
「はいよろしくお願いします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」
「流石に其れはご勘弁を」
「駄目ですか」
「其処までは儂が持ちませんわ」
「判りました其れはあきらめます」
「御意」
「御意も止めましょう、はいか判りましたで良いでしょう」
「判りました」

爺様も納得してくれたらしく、終始にこやかに進みますね。
爺様が身を正して真剣な顔をして此方へ向かい直した。

「テレーゼ様先週頼まれました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民２５０億の中からですから中々調べが進みません」
「其れはそうです其処まで無茶は申しません」
嬉しそうですね又試しましたか、食えない爺様ですね、まあ其れが其れで楽しいんですがね。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」
ニヤニヤしてますね、判りますよ金と赤でしょ、判ってて言ってるな、けど金は知ってるが赤は知らないふりをしないとね。

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミュッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミュッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」
「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」
全く危険物を使いこなせと言うのですかね、いやからかってるんで

すね、ニヤニヤ。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。今は様子見で良いでしょう父様の様にね」

爺様其処までと言う顔をしてみてるね、爺様クルーじゃなきゃ駄目だよフフ。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせておりますので、その者を呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

「判りました」

そうすると爺様はインターホンで誰かを呼んでます、暫くするとノックがされて２０代中盤ぐらいの士官が入ってきました。

「閣下ケスラー大尉入ります」

「うむ、ケスラー大尉よう来た、テレーゼ皇女殿下じゃ、殿下私の部下で取り纏めをしているケスラーと申します、ケスラー皇女殿下にご挨拶を」

おー来ましたよーケスラーです、ロリですよロリとの遭遇ですよ、ケスラーにしては私はドストライクゾーンです。

「皇女殿下ご尊顔を賜り恐悦至極で御座います、小官グリンメルスハウゼン閣下にお仕えする、ウルリッヒ・ケスラー大尉と申します。元来平民たる臣が皇女殿下に直接ご挨拶するなど不敬の極みで御座いますが平にご容赦をお願いいたします」

なるほど爺様ケスラーも出汁に使ってるな。ケスラーも気の毒に此処は助けてあげましょう、私の中ではケスラーの信頼度凄く高いから、仲良くしたいいね。

「ケスラー大尉その様にかしこまらなくても構いません、私達は同士です皇族、貴族、平民の差など何がありましょう。同じ赤い血の流れた人間じゃないですか、そんなへりくだった挨拶は無用ですよ。私のことはテレーゼで良いですよ」

ケスラー驚いてますそりゃそうだよね、六歳児の言うことじゃないし。

「その様な恐れ多いことを」
「返って敬語を使われる方が気になりますよ」
「ケスラーよテレーゼ様が良いとっしゃっておるのじゃテレーゼ様とお呼びすればよい」
「御意」

「じゃあ改めてケスラー大尉テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです此からよろしくお願いしますね」
「テレーゼ様ウルリッヒ・ケスラー大尉と申します、此よりテレーゼ様にお仕えし足します、どうぞよろしくお願いいたします」
「よいの此で顔合わせは終了じゃな。早速話し合いに入るかの」

「よろしくお願いしますね」
「判りました」
「ケスラー資料を」
「御意」

第二十話　人材収集計画

帝国歴４７８年１月１４日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様が本日いらっしゃる、どの様におもてなしするか楽しみじゃな。
いらっしゃったようじゃ、シャキッとした姿勢と眼光でお出迎えじゃな。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」
「グリンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

ほうほう驚かんな、流石じゃちと試してみるかの。

「グリンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」
「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」
ほう速攻で返した来たのしかもラテン語とは流石じゃ。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」
「よろしくお願いしますね、アウリス殿」
「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」
「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

立派じゃな師を尊ぶ心、普通はとても出せんの。
「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」
嬉しくてついつい顔にでしてしまうの。
「はいよろしくお願いします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

さて本題に入るかの。
「テレーゼ様先週頼まれました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民２５０億の中からですから中々調べが進みません」
「其れはそうです其処まで無茶は申しません」
やはりちゃんと判ってらっしゃる、人材としてあの者の話をして見るかの一度お会いしておるし、どの程度の人物眼があるかの。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」
「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミュッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミュッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」
テレーゼ様すっとぼけておりますな。
「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」
ニヤッとしましたな判ってらっしゃる。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。
能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。
今は様子見で良いでしょう父様の様にね」
ほう僅かな会見で此処まで人物鑑定をするとは、儂でもかなわんなそろそろケスラーを呼ぶかの。
「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせてお

りますので、その者を呼んで宜しいでしょうか」
「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」
受け答えも完璧じゃな、しかもケスラーに対しての受け答えも皇族貴族平民の身分差も考慮しない大らかさ、此こそ王者のカリスマじゃものすごく楽しみになってきたの。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　ウルリッヒ・ケスラー

初めて皇女殿下にお会いし驚いた6歳なのにあの威厳カリスマ聡明さ末が楽しみな女傑と成るはずだ、私がへりくだって挨拶したとき、同士だからと名前で呼んでくれと言われ驚いた。
しかも身分に躊躇しない大胆さ此は本物だ、これほど嬉しいことはないだろうこれからが楽しみだ。
閣下と共にお仕えに足るお方だ。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸

「さて其れでは今回の趣旨を説明します。
此から数年をかけて銀河帝国の病巣を取り除く外科手術と考えて下さい。
その為の優秀な人材がまず必要となります。
そこで人材のリスト作成をお願いします」

「諒解しました」
「まず忠誠心な厚い優秀な軍人を此は宇宙艦隊司令官候補、幕僚参

謀候補に当てる艦隊派。
的確な作戦を立てられる作戦派。
補給担当、後方支援等の後方派。
陸戦部隊。
また現在の技術部主流から外れた外された所謂勢力争いで負けた組などから優秀な人材を密かに秘密研究所へ移転させる。
帝国内、叛徒内、フェザーン内に作るスパイ組織の構成員。
政治に関しては、今までの政治に囚われない斬新な政策を考えられる者。
社会整備、インフラ、流通、経済等に詳しい者。
尚門閥貴族の紐付きではなく出来る限り下級貴族平民等から人材を集めてる。
こんな所ですね」

爺様もケスラーも驚いていますね。とても六歳児が考える物じゃないと、仕方がないですよ死にたくないですから、このまま座していればラインハルトに滅ぼされる可能性が大きいのですから。

爺さんとケスラーが頷き有ってから返事が来たね。
「テレーゼ様のご指摘誠に理にかなっております、全力をかけて行動に移します」
「よろしくお願いしますね」
「判りました」
「其れでは私の方も色々な所を廻り此と思う人材をピックアップします」
「その者達の調査はお任せあれ」
「其れでは失礼しするわね」
「はっお気御付けてお帰り下さい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3863x/

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

2011年10月24日01時33分発行